

未来の世代が安心して住み続けられる地域を守るために――

# 宮田の環境を守る会通信

Vol. 13

私たちは、宮田村大久保区に民間事業者が計画している、放射性物質を含む廃棄物最終処分場の建設に断固反対します！

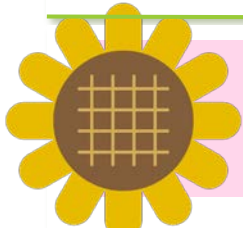
2016年8月10日



## 「福島原発事故と特措法」

6月19日：学習会：小出 裕章さん（元京都大学原子炉実験所助教）

福島第一原発事故と特措法（放射性物質汚染対処特措法）について、分かり易くお話し頂きました。「原発事故では、大気中だけで広島原爆の168発分のセシウム137が放出された。」「事故当日に政府が発令した原子力緊急事態宣言は、事故から5年以上経った今も解除されていない。まだ緊急事態下にある。」「現在の放射性廃棄物の処分方法は、緊急事態下でつくられた特措法であり、従来の法律では危険とされているものを処理できるようにしている。」「放射性物質は元々東京電力の所有物であるので、東京電力の敷地内に集めるべき。」「事故で汚染を受けなかった宮田村や住民が、放射能のごみを受け入れる必要はない。」といった話がありました。【質疑等については裏面へ掲載】



## 地元選出の県議会議員との懇談会

7月27日

三人の県議が来てくれました！

佐々木祥二県議（駒ヶ根市選出）、小林伸陽県議（上伊那選挙区選出：箕輪町）、酒井茂県議（伊那市選出）の三人の長野県議会議員にお越し頂き、宮田の環境を守る会と駒ヶ根の水と命を守る会で懇談を行いました。

「皆さんの声を県政へ反映したい」「放射性物質を含んだ廃棄物の処理は、



今後ますます問題となる」「県としては法律や基準に基づき判断するだろうが、最終的に知事が皆さんの声をどう捉えるかである」といった話があり、活動への支援や助言、また、署名を知事へ直接手渡せるよう協力依頼を行いました。

誰でも自由に参加できます！

## 次回 学習会のお知らせ

『宮田大久保地区の地質条件』

伊那谷の地質学の権威である松島信幸さん（理学博士）より、太田切川が形成した扇状地、また天竜川との関係などについて地質学の見地からご講演頂きます。

【講師紹介は裏面参照】

日：9月4日（日）

時：13時30分～

場：宮田村民会館第3～5研修室

## 建設反対署名の集約情報

8月8日現在

署名総数 **98,835名**

大勢の皆様のご協力に心より感謝申し上げます！

最新情報は「宮田の環境を守る会」のホームページをご検索、ご覧ください！

## 学習会「福島原発事故と特措法」の質疑応答より

質問：「年間の被ばく量の上限量は年間1ミリシーベルトというが、これはここまで被ばくをしても大丈夫という基準か？」

(小出先生) 被ばくに関する限り、安全だとか安心だとか大丈夫という言葉は使ってはいけない。被ばくは、どんなに微量でも必ず危険が伴う。基準は、今の社会で生きるためには、どこまで我慢すべきか？という社会的な取り決めでしかない。1ミリシーベルトというのは、被ばくした人の2500人に一人の人が癌で死ぬというぐらいの危険で、これぐらいは我慢しようというように決められた基準である。

質問：「これから県や国とどう対峙していくべきか？」

(小出先生) 法律は専門ではないので分からないが、一番大事なことは、住民の皆さんが絶対に受け入れられないと固い意志を持ち続け、態度を崩さずに今後も県と交渉することである。

質問：「チェルノブイリは事故後、住民を強制退去をさせ、除染作業をしていないが？」

(小出先生) 日本は、莫大なお金を使って帰村などできるように除染作業をしているが、山などは手付かずのまま。除染作業をしても放射線管理区域に住むことは、到底私は想像できない。放射線管理区域にしなければいけないような汚染地帯は、コミュニティ規模で移住させるべきで、福島第二原発を全て放射能のごみ捨て場にして集めたほうが、はるかに安全。

質問：「放射能は『半減するからそのうち大丈夫になる』というがそれで大丈夫なのか？」

(小出先生) 今日私はセシウム137という放射性物質が人間に対して一番危険を及ぼすと話した。そのセシウム137という放射性物質は30年経つと半分が減る。それから30年経って、またその半分。初めの汚染に比べると1/4になる。30年、30年、、、で10回分、半減期の10倍の長さの時間(300年)が経つと、初めの汚染の1/1000になる。青森県の六ヶ所村は300年間監視をすると、国が言っているがそれはそういう考え方。ですからもし、宮田村の処分場に1kgあたり、8000ベクレルの汚染物質が持ち込まれてコンクリートでも何か置き場を作って、その中もコンクリートで固めても、その貯められたセシウムが、1/1000になるまでに300年がかかる。皆さんはもちろん全員死んでいるし、300年後って何世代先の子孫になるか知りませんが、それぐらいの時間が経って初めて1/1000。それでも完全に安全になったわけでは無い。300年後なんて、そこの処分場はありません。会社がまずは無くなっているだろうし、コンクリートを300年間点検出来るかって言ったら、そんな事あるはずがない。ましてや、天竜川や太田切川や、地盤があんなびしょ濡れのようなところで、コンクリートが300年間もつはずがないから、ずっと前に放射能は下流に流れていくという事になるだろう。



## 9/4(日)学習会 『大久保地区の地質条件』の講師

(講師紹介) 松島 信幸(まつしま のぶゆき)氏

高森町在住。理学博士。専門は地質学。長野県内小中学校の理科教師をつとめ、在職中から赤石山脈や伊那谷の地質調査を行った。赤石山脈の地質構造を明らかにし、伊那谷活断層帯を発見するなど、山脈形成や伊那盆地形成についてそのおすじを解明する。日本地質学会名誉会員。伊那谷自然友の会常任委員。飯田市美術博物館顧問。

発行：宮田の環境を守る会  
会長：田中 一男(村議会)  
miyadakankyo@gmail.com

